入試年度	2026	入試方式	一般（春季）	課程	博士前期
研究科	発達教育学	専攻	教育学	領域（分野）	

出題のねらい

本論文では、まずルソーが『エミール』を著した時代背景への言及から始める必要がある。中世ヨーロッパにおいて、子どもは「小さな大人」と見なされ、早く大人になることに価値が置かれていた。これに対してルソーは、キリスト教的な原罪説を否定し、子どもの生まれながらの善性を説いた。同時に、愛すべき存在としての子ども、および子ども期の固有性と重要性を明らかにしたのである。この点に留意しつつ、提示された文章を読み解くことが求められる。そのうえで、ルソーの思想的観点から現代社会における子育てと教育の課題を提示し、それらの課題にどのように向き合っていくべきかを考察されたい。

解答・解答例または採点時の評価ポイント

【解答例】
ジャン=ジャック・ルソーが『エミール』を著した18世紀当時、ヨーロッパ社会では依然として中世以来の子ども観が支配的であった。フィリップ・アリエスが『＜子供＞の誕生』で明らかにしたように、中世ヨーロッパにおいて子どもは「小さな大人」とみなされ、できるだけ早く大人になることが価値あることとして考えられていた。その背景には、キリスト教的原罪観があり、子どもは生まれながらに原罪を背負っているがゆえに、早期に躾を施して大人へと導く必要があるとされていたのである。特に貴族階級の子どもたちは、幼少期から書物による詰め込み式教育を受けさせられていた。
　こうした時代状況に対して、ルソーは画期的な子ども観を提示した。ルソーはキリスト教的な原罪説を否定し、子どもの生まれながらの善性を説いた。そして、それまで十分に認識されていなかった愛すべき存在としての子ども、および子ども期の固有性とその重要性を明らかにしたのである。ルソーは、子ども時代を十分に享受することがその後の発達にとって本質的な意味をもつことを主張した。
　ルソーは幼少期の教育において、書物による知識の注入よりも、身体を用いた直接的な経験や感覚器官を通じた学習を重視した。「へたに教育された子どもは、ぜんぜん教育をうけなかった子どもよりもずっと知恵から遠ざかる」という言葉は、この観点を端的に示している。ルソーは、「一日じゅう、飛んだり跳ねたり、遊んだり、走りまわったり」することで、その時期にしか得られない経験を積み、その時期にしか学べない事柄を習得することの必要性を主張した。また、当時は子どもの死亡率が極めて高く、成人まで生存できない子どもも少なくなかったことから、訪れるかどうか不確かな未来のために子ども時代を犠牲にするよりも、子どもが子ども時代を十分に遊び、幸福に過ごすことの価値を重視したのである。
　このルソーの思想的観点から現代社会における子育てと教育のあり方を省察すると、以下のような課題が浮かび上がる。第一に、子ども時代に必要な直接経験が十分に保障されていない子どもが多いという現状がある。デジタル機器の普及により、身体を用いた直接経験よりも間接的・媒介的な経験が増加している。第二に、「早さ」や「効率性」といった価値観が優先され、子どもが子ども時代を十分に享受できていない状況がある。早期教育への関心の高まりや、幼少期からの習い事の過密化などは、まさにルソーが批判した「小さな大人」として子どもを扱う姿勢の現代的表れとも言える。第三に、総合的な学習の時間や探究学習など経験主義的な教育方法が導入されてきているものの、依然として知識注入型の教育観が根強く、十分に浸透しているとは言い難い。
　一方で、希望の兆しも見られる。近年では非認知能力の重要性が認識されるようになり、自然体験や遊び、仲間との葛藤などの多様な直接経験を通じて育まれる非認知能力が、認知能力の土台となることが明らかになってきている。幼稚園教育要領や学習指導要領の改訂においても、こうした観点が反映されるようになった。これは、ルソーが重視した子ども期固有の経験の価値が、現代の科学的知見によって裏付けられつつあることを示している。
しかしながら、いまだこうした知見が実際の子育てや教育実践において十分に活かされているとは言えない。我々はどのようにこの課題に向き合っていくべきであろうか。
　まず、子どもの生まれながらの善性と、子ども期の固有の価値を改めて認識することが求められる。子どもを「未熟な大人」や「将来への投資対象」として見るのではなく、「今、ここ」を生きる存在として尊重する視点が必要である。
　次に、教育における「経験」の質を問い直すことが重要となる。ルソーが重視した身体性を伴う直接経験、感覚器官を通じた学び、自然との触れ合いなどが、現代の子どもたちの生活においてどの程度保障されているかを検証し、不足している場合にはそれを補う環境を意図的に創出する必要がある。
　さらに、「早さ」や「効率性」といった価値観と、子ども期固有の時間性との間でバランスを取ることが求められる。先の見えないVUCA時代を生きる子どもたちにとって、急速に変化する社会への適応力は確かに重要である。しかし、その土台となるのは、ルソーが説いたような、子ども時代に十分に遊び、多様な経験を通じて育まれる柔軟性や創造性、他者との関わりの中で培われる共感性などである。
　最後に、我々大人自身が、子ども観と教育観を問い続ける姿勢が不可欠である。ルソーの思想を単なる歴史的遺産として学ぶのではなく、現代の文脈において読み直し、その本質的な問いかけに応答していくことが求められる。すなわち、子どもにとって真に必要な経験とは何か、いかなる形態で教育を行うべきか、そして子ども時代を子どもとして生きることの意味とは何かを、試行錯誤しながら問い続けることである。
　ルソーが提示した子ども観は、200年以上を経た今日においてもなお、我々に重要な示唆を与え続けている。現代社会における子育てと教育の課題に向き合うにあたって、ルソーの思想を基盤としつつ、時代の変化に応じた新たな実践を創造していくことが、我々に課された責務と言えよう。